

TOPIC

大学院看護学研究科「博士後期課程」を開設して[寄稿]

看護学研究科は、看護の実践・研究・教育の場で活躍できる高度な専門知識、技術、実践能力を有する人材の育成を行い、看護学の創造と発展に貢献することを目指し、平成14年に修士課程を開設しました。

以来、123名の修了生(令和4年3月末現在)を輩出し、看護実践の場や教育・研究機関において看護実践の質向上に貢献しようとする人材を育ててまいりました。

しかし、急速な少子高齢化の進展、地域間格差の進行、度重なる自然災害からの復興、新興感染症の台頭など、人々が抱える健康問題は複雑多様化しており、さらなる看護実践の質向上が求められるようになりました。

大学院看護学研究科再スタート 前期2年・後期3年の博士課程

そこで、人々のニーズに応える独創的なケアやケアシステムの開発に資する研究力・研究指導力を備えた人材を輩出すべく、本年4月、博士後期課程(実践開発看護学領域)を開設しました。既存の修士課程は博士前期課程に変更し、看護学研究科は、前期2年・後期3年の区分を有する博士課程として再スタートしたところです。

看護教育・研究者と 看護実践指導者の育成を目的

博士後期課程は、複雑多様化する人々の



ニーズに応えるケア開発及びケアシステム開発の方法論を考究する「実践開発看護学」の構築および発展に資する研究を自立して行い、看護実践の質の向上を図る看護教育・研究者と、研究指導力を発揮して看護実践の変革を牽引できる看護実践指導者の育成を目的としています。

長期履修制度や週末開講など 社会人入学者へも配慮

定員は2名、博士論文を含む16単位以上を修得し、修了時には「博士(看護学)」の学位を授与されます。また、社会人入学者に配慮して長期履修制度や週末開講なども行っております。

開設初年度である令和4年度は、入学者2名で1年次のみを開講ですが、実践開発看護学を構成する専門科目の「ケア開発看護学特講」、「ケアシステム開発看護学特講」、「看護研究特講」を開講しています。

1年前期後半からは、研究課題の焦点化・明確化を図るため、座学と臨床を連動させた「実践開発看護学演習」も開講する予定です。

授業では課題に対するプレゼンテーションや、教員、学生の垣根を超えたディスカッションを通して、物事の真理を明らかにしようとする姿勢、問題の所在を探求する力、論理的に思考し、問題解決のための科学的思考と実践力、研究力を磨きます。

人々のケアニーズに応え、エビデンスのある革新的なケアを創造する能力、包括的かつ継続的なケアシステムを開発する能力を備えた看護職を輩出し、福島の未来に貢献したいと願っています。

看護学研究科長 高橋香子 教授

詳細は
こちらから



5月31日は世界禁煙デー 5月31日から6月6日までを「禁煙週間」

5月31日は世界保健機関(WHO)が定める「世界禁煙デー」です。

本学法医学講座黒田直人教授が事務局長を務める一般社団法人「Tobacco-freeふくしま」は福島県医師会とともに、キャンペーンを

象徴する「YGリボン」をあしらったバッジやシール、プレスレットなどの啓発グッズを福島県タクシー協会へ寄贈。黒田直人教授が贈呈式に参加しました。

本学でも、6月6日まで、ふくしまのちと

未来のメディカルセンター棟前の案内板をキャンペーンカラーのイエローグリーンにライトアップしています。自分と大切な人の命と健康を守るため、禁煙について考えてみませんか。



ある日の取材で目にした光景です。「元気？」と奥会津在宅医療センター鎌田一宏医師(会津医療センター 総合内科学講座特任准教授)からの問いかけに、「元気だあ」と笑顔で答える患者さん。「ほんとに!?じゃあ、ちょっと診せて」と明るく話すやり取りから訪問診療が始まりました。

■ 本学より医師、看護師を派遣

奥会津在宅医療センターは、令和2年7月に福島県と本学の共同プロジェクトとして開設され、福島県立宮下病院と協働して運営しています。本学会津医療センター附属病院から、山中克郎センター長(会津医療センター総合内科学講座教授)や前述の鎌田一宏医師をはじめ、医師、看護師のみなさんを派遣しています。

柳津町、三島町、金山町、昭和村で医師と看護師、ドライバーがチームを組み、訪問診療、訪問看護を展開しています。急性期疾患や慢性疾患の診療、寝たきり老人への訪問医療、看取り、地域住民を集めての健康増進教室やワクチン接種など活動は多岐にわたります。高齢化、過疎化が進み、日本でも有数の豪雪地帯であり、病院までの移動時間

が長く、通院もままならない奥会津地域の方々にとってはかけがえのない存在です。

■ 医師として総合力を身につける場

医師が定期的にご自宅に伺い診察を行う訪問診療では、病気の治療だけでなく、肺炎や褥瘡などの予防、栄養状態の管理など、予測されるリスクを回避し、入院が必要な状態を未然に防ぐ重要な役割を担います。

必然的に医師も総合診療の能力を求められます。そしてこのことは、「医師としての総合力を身につけることにも繋がる」と山中克郎教授は話します。

また、訪問看護では、看護師がその方の病気や生活に応じた健康状態の悪化防止や、回復に向けたお手伝いをを行います。時には主治医の指示を受け、病院と同じような医療処置も行い、自宅で最期を迎えたいという希望に沿った看護も行っています。

前述の鎌田一宏医師は、「まずは一度、奥会津在宅医療センターに見学に来て欲しい」と呼びかけます。

これからも地域住民のみなさんが医療を諦めることなく、大好きな住み慣れた自宅で、最期まで家族と一緒に幸せに暮らせる



健幸倶楽部での講演風景
押部郁朗医師(会津医療センター総合内科学講座特任准教授)

お手伝いをしていくため、今後に向けた様々な検討が関係機関と行われています。

■ 見学お待ちしております

医師、看護師のみなさんはもちろん学生のみなさんも、ぜひ一度、奥会津在宅医療センターを訪ねてみてはいかがでしょうか。

詳細は
こちらから



「病と闘う子どもときょうだいの作品展」展示作品募集中! パンダハウス主催バーチャル展覧会



本学附属病院で入院し、小児がんなどの難病と闘う子どもやその家族のための滞在施設「パンダハウス」は、令和4年10月に開所25周年を迎えます。施設を運営する認定特定非営利活動法人(NPO)パンダハウスを育

てる会は、その記念イベントとしてバーチャル展覧会「病と闘う子どもときょうだいの作品展」を本年12月に開催を予定しています。

現在、本学附属病院で病と闘っているお子さんとそのきょうだい(0才~高校生まで)を対象に、令和4年8月31日(水)まで展示する作品について募集中です。

小児がんなどの難病は、医療の進歩により治療率が格段に上がってきた一方で、厳しい闘病生活と長期間向き合わなければならない現実があります。さらに、今般の新型コロナウイルス感染症によって面会も制限され、子どもたちは、閉ざされた生活を余儀なくされています。

そこで、闘病中の子どもたちに「楽しいひと時を届けたい!」との思いから本プロジェクトが立ち上げられました。生活の中で感じることを自由に作品にしてもらい、その作品をインターネット上で立体的に再現したパンダハウス施設内に展示します。

展覧会は、一般のみな様にもお越しいただけます。闘病中の子どもたちが作る活き活きとした作品に触れ、その向こう側で輝く笑顔に思いをはせてみてはいかがでしょうか。

詳細は
こちらから

